

東北地方北部の青木畠式土器

永 嶋 豊

1 はじめに

東北地方北中部の弥生時代前期初頭の土器型式は、津軽地方を中心に分布する『砂沢式』、東北地方中部太平洋側を中心とする『山王Ⅳ上層式』、日本海側の庄内地方で確認されている『生石2式』があげられる。『砂沢式』に続くものとして『五所式』(村越 1965 津軽地方中心に分布)・『二枚橋式』(下北上北地方中心)、『山王Ⅳ上層式』に続くものとして『青木畠式』→『山王Ⅲ層式』の流れが考えられている。

青木畠式土器は宮城県一迫町青木畠遺跡出土資料を基準資料とし、山王Ⅳ上層式に後続し、山王Ⅲ層式に先行することが型式設定当初から指摘されていた(佐藤1980 加藤1982)が、近年の東北大大学による岩手県中神遺跡の調査における層位的出土によって実証された(須藤1997)。青木畠式土器は北上川流域を中心に仙台平野・岩手県三陸沿岸に主体的に分布し、山形県内陸の村山地方の蟹沢遺跡出土器群も高壺の形態に青木畠式と共通性を有する。東北地方北部では、青木畠式に先行するとされる砂沢式期の水田跡が青森県弘前市砂沢遺跡で検出されて久しい。遠賀川系土器の存在もあわせ、遠く西日本に由来する水田稲作技術の導入期は、現段階では砂沢式期またはそれ以前と考えられよう。生石2式は、山形県庄内地方で確認されている。砂沢式の分布範囲は、秋田県北部域・青森県域・馬淵川・新井田川流域までと考えられる。福島県を除けば、この生石2式・砂沢式の分布範囲と弥生時代前期初頭の遠賀川系土器の分布範囲は一致している。弥生時代前期初頭(砂沢式期)の遠賀川系土器は、生石2式・砂沢式に伴うと考えられ、山王Ⅳ上層式の分布範囲と考えられる北上川流域・三陸沿岸・宮城県域にはほぼ皆無であることが明らかになっている(佐藤嘉広1989・1991・1992・1994)。東北地方中部太平洋側では東北地方日本海側や馬淵川・新井田川流域より1型式期遅れ、青木畠式段階で、それらの要素が受容されると考えられている。東北地方北部では、近年、弥生時代前期土器及び竪穴住居跡等の検出例の増加から、資料数は着実に増加しているが、土器の編年的位置付けに関しては、縄文時代晩期末(大洞A'式)~弥生時代前期として報告されている例が多い。その中には砂沢式以後・青木畠式期の土器を含むものも多く、特に該期の新井田川・馬淵川流域は土器型式の接触地域と考えられてきただけに、社会変化の様相を把握する為には、その時期決定の指標ともなる土器型式内容に対する正しい評価を示す必要があろう。

今回、東北地方北部の該期の時間軸の整理に、主要分布圏が異なる青木畠式土器を中心に扱った理由は、北上川流域の青木畠式→山王Ⅲ層式という流れが確立されたものであるということと、津軽地方の砂沢式以後とされる五所式土器(村越1965)の基準資料が量的に乏しく、型式内容が必ずしも明らかになってはいない為である。現在では、『五所式』は津軽地方の砂沢式土器以後の段階を示す概念として既に定着しており、新資料を用いての型式内容の再整理が望まれる。本論では馬淵川・新井田川流域の資料を多く扱い、3型式とも分布域である為、時期の呼称には砂沢式期・青木畠式期・山王Ⅲ層式期を用いた。

各地の出土資料より、青木畠式土器は砂沢式に近い段階・青木畠式単純段階・山王Ⅲ層式に近い段階が存在すると考えられる為、それぞれ青木畠式(古)段階・青木畠式(中)段階・青木畠式(新)段階と仮称

する。青木畠式(古)段階は砂沢式期の一部を含み、(新)段階は山王Ⅲ層式期の一部を含む。本論では、東北地方北部の青木畠式的な土器群をピックアップし、大まかな新旧関係を明らかにした上で、特徴的な細別器種の分布範囲を把握することによって、土器の動きの特性を明らかにしたいと考えている。

2 青木畠式土器の基準資料

青木畠遺跡は、宮城県栗原郡一迫町の一迫川・長崎川が形成した沖積平野西端部の自然堤防上に位置する。佐藤信行が大洞A'式と山王Ⅲ層式の間に入る土器群として、表採品等を発表している(佐藤 1980)。1972年に宮城県教育委員会により発掘調査が行われ、その型式学的特徴から、大洞A'式に後続し山王Ⅲ層式に先行する土器型式に位置付けられた(加藤道男 1982)。須藤隆は、「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式—」中で、山王Ⅲ層式と共に青木畠式にも触れ、青木畠式は変形工字文C1型主体・山王Ⅲ層式は変形工字文C2型主体であることや細別器種の有無など相違点は存在するが、器種類型・組成比率は極めて良く共通していることを指摘している(須藤 1983)。また須藤は、岩手県花泉町中神遺跡の調査において、従来から確実視されていた青木畠式の編年的位置を層位的出土例から実証した(須藤 1997)。佐藤・加藤・須藤の考える青木畠式土器の編年的位置・型式学的特徴はほぼ共通している。以上3人の研究者の考え方を参考にし、各型式間の相違点をまとめたものが表1である。

表1 砂沢式→青木畠式→山王Ⅲ層式の変化点

	砂沢式・山王Ⅳ上層式段階→青木畠式段階の変化点	青木畠式段階→山王Ⅲ層式段階の変化点
新出器種	蓋・上膨筒形土器・有段高坏	坏部全体が直線式に広がる高坏
甕・甕用蓋	平坦口縁の甕と粗製の蓋のセットが出揃う。 深鉢・甕の口唇部キザミは少数	平坦口縁の甕形が増加し、蓋とのセットがより多くみられるようになる。肩部が張り出し、頸部がより大きく外反するものも増加する。
変形工字文	変形工字文A型→C1型へ変化し、底角部が丸みを持って反転し上下幅を有する	変形工字文C2が盛行(底角反転部の上下幅が大きくなる)
変形工字文各要素	変形工字文各部の彫り込みやそれに伴う粘土粒の貼付が非常に少なくなる。	変形工字文各部の彫り込みやそれに伴う粘土粒の貼付がほぼ消滅する
高坏脚部	高坏脚部が大型化し、内巻気味に立ち上がる。平行沈線や2~3条一組の波状文や横型の変形工字文C1型が施される。	波状文が盛行し、高杯脚部の他に、高杯・鉢や壺の体部にも見られ、3~4条一組と多条化する傾向がみられる。
磨消繩文	極少数	磨消繩文が盛行し、重填繩文も見られる
その他	高坏突起には大きなものがみられる 変形工字文の沈線がふるえ途中で途切れるものが見られる	高坏・鉢・壺などの装飾的な精製土器には、北上山地起源と考えられる金雲母が多量に混和される。 籠ミガキの多用・沈線の細線化・有段高杯も存在

佐藤・加藤・須藤が用いた基準資料は北上川中下流域の宮城県域のものが中心である。これを地域性を異にするであろう馬淵川・新井田川流域に適用させることは問題があろうが、土器型式として確立している北上川中下流域と対比することは、馬淵川・新井田川流域の土器群の時間的組列確立の近道であろうし、互いの地域性を浮き彫りにもできよう。

3 各地の青木畠式期土器

津軽地方・馬淵川流域を中心に青木畠式期の土器・土器群をあげ、その帰属時期を考えてみたい。しかし遺物の一括性・同時性が高い土器群が、非常に少ないことが問題としてあげられる。良好な一括性を有しているような遺構内出土資料も、床面出土と覆土出土とでは、その廃棄・埋没ケースによってそれぞれの同時代性は異なるであろうし、厳密な意味での一括土器は、焼失住居床面出土資料や一時期に複数個がおさめられた埋設土器等に限定されるため、一般に資料数は限られてくる。また床面出土と埋土出土の認定も、調査担当者によって異なる。特に報告段階で、出土層位や資料の一括性に触れないものも多く、非常に悩まされた。そのため今回は、住居跡の場合は、まとまりを持つ床面出土

資料を基本としながらも、覆土中のものや包含層出土のものでも同一型式内の特徴と見られるものは、同時期と考えたものもある。もうひとつの問題点として、型式変化のとらえ易い属性を有する一部の器種(高坏・浅鉢等)が、多くの場合、土器群全体の帰属時期決定の指標となることである。

青木畠式期の特定の細別器種は、山王Ⅲ層式期に継続するものが多い。また両型式の特徴を有する土器が同じ遺跡で出土している場合も多く、両者の分離が困難であった。このことは型式変化が基準資料から基準資料への変化といった急激な変化ではなく、両型式が一時期において、同時性を有する可能性を示唆している。須藤隆は、青木畠式と山王Ⅲ層式古段階の関係は若干の時間差もしくは同一段階とみている(須藤1983)。その中でも、青木畠遺跡の資料は、他型式をほとんど含まずに、比較的単純な状態で検出されており、東北北部でも該期社会の把握には、基準となりうる資料の選択・確立が必要であろう。

【青森県津軽地方～秋田県内陸北部】

【砂沢遺跡】青森県弘前市

砂沢式土器の標式遺跡であるが、砂沢式またはそれに後続する土器群に伴って、青木畠式または山王Ⅲ層式期のものと考えられる高坏が出土しており(4)、金雲母を含むものもある(1・3)。1992年刊行の『弘前の文化財－砂沢遺跡－』中に、報告書未掲載であったA10区出土資料が報告されている。これは本報告において矢島敬之がA8区出土土器群と共に砂沢式に後続する土器群に分類し、五所式期・井沢式期に位置付けたものであり、一括性は不明であるがA10区土器には青木畠式的な高坏が2点みられる(2・5)。

【宇田野(2)遺跡】青森県弘前市

砂沢遺跡の南2kmの地点で、岩木山の麓の大石川が本流岩木川と合流する地点より西方2kmの標高30～40m程の中位段丘上に位置する。石鏃やベンガラが出土した、5基の土坑墓が検出されている。墓域から50m程南の谷地形の遺物密集地点から、縄文時代前中期の土器などと混じって弥生時代前期の土器が出土している。砂沢式の高坏や鉢や無文帶を有する煮沸用の深鉢・鉢が出土している。しかし砂沢式期よりも新しい要素を含む土器も多い。鉢に施された楕円文の存在(11)、流水状工字文(8・10)・変形工字文(13)の底角部が丸みを帯び反転し上下幅を有すること・変形工字文の斜辺が多条化(変形工字文B型化)するように見えるものの存在(6・7)・やや内湾しながら立ち上がり、平行沈線文と無文部で装飾される高坏台部の存在(14・15)・口頸部に波状文が施された鉢の存在(9)等である。これらの土器群は砂沢式以後と考えられる。当遺跡にも砂沢遺跡同様、岩手県域からもたらされたと考えられる金雲母を多く含む土器が見られる。観察したところ、報告書掲載土器中、高坏3点と壺1点が確認できた(12・15・16・報告書中84)。12は変形工字文が施される平坦口縁の高坏、15は3条一組の平行沈線文が施される脚部である。16は口縁部に平行沈線や平行工字文が施される縄文時代晚期後葉からの伝統的な壺である。出土状態は、各土器混在であるので、同時代性は明らかではないが、砂沢式期の土器を含みながらも、新出要素または青木畠式的様相を示すものもあり、青木畠式(古)段階と考えたい。

【上牡丹森遺跡】青森県南津軽郡大鰐町

縄文時代後期後葉の住居跡と重複している第2号住居跡から、青木畠式期と考えられる遺物が出土している。18の頸部無文となる鉢も砂沢式以後の要素であろうし、17の肩部の張り出しありやや新しい

要素であろう。また19の高坏は大型の台部に平行沈線が施され、坏部が緩やかに内湾しながら立ち上がり平坦口縁となり、青木畠式～山王Ⅲ層式期に北上川流域や馬淵川・新井田川で認められる形態である。遺構外からではあるが、遠賀川系の可能性のある壺の肩部破片も出土している。高坏・小型鉢(20・21・22)の細線化が進んでおり、青木畠式の新しい段階と考える。

【諫訪台C遺跡】秋田県大館市

米代川の支流である長木川流域の標高102～105m程の舌状台地上に位置する。砂沢式前後の竪穴住居跡が6軒検出されている。住居跡内からは良好な一括出土土器が3群確認され、報告者の利部修によってそれぞれ縄文時代晩期末葉～中間的な土器群～弥生時代初頭の土器に比定されている。その中に金雲母を含む土器として4点の土器があげられており、岩手県域からの搬入の可能性が高いとされている。SI61の27の高坏は金雲母を含み、坏部は平坦口縁となり反転部の上下幅の広い縦型流水状工字文が施され、台部は3条の平行沈線2組で装飾されている。青木畠式期に近い段階の土器であろうか。また遺構外出土の29の高坏も同様の台部を有し、変形工字文も大日向Ⅱ遺跡出土の高坏(67)と同様に長楕円を基本線としたものであり、砂沢式期以後の要素と考えられよう。28の高坏は、脚部文様間に刺突が施され、砂沢式的である。脚部に鋸歯文が施される例は東北地方北部で散見され、波状文へと変化していくものと考えられる。その他SI61出土の鉢23の横長楕円文とSN床出土鉢26の沈線が途切れる変形工字文は生石2遺跡や青木畠遺跡に、24と25の全面に横走沈線が施される鉢は生石2遺跡や君成田下野場遺跡や下北郡川内村戸沢川代遺跡に類例がある。砂沢式的な土器に、青木畠式的土器も含まれ、青木畠式期(古)段階に位置付けたい。

【下北地方・青森県東南部～岩手県内陸北部】

【戸沢川代遺跡】下北郡川内村

戸沢川によって侵食された海岸段丘が、舌状に南方に張り出した丘陵突端に位置する。該期の遺物は、すべて遺構外からの出土である。掲載されている実測図の鉢の文様は、横型の流水文を多用(33・34・36・38)すること、変形工字文斜辺が波状文による構成である(32・35・37)こと、変形工字文間に斜辺と刺突が充填されることなど、砂沢式よりは後出の土器群であり、二枚橋式以前の土器群と考えられる。

【八幡遺跡】青森県八戸市

馬淵川の右岸標高6～20mの低位段丘上に位置する。昭和62年度の調査で、弥生時代前期土器と共に、遠賀川系土器の甕と壺が出土している。この中には砂沢式段階のものと砂沢式に後出する段階のものが含まれている。また平成2年度の調査で、第12号住居跡床面直上(2層)の土壌から、コメ・オオムギ・コムギ・アワ・ヒエ・キビなどの栽培植物の種子が検出されている。分析者の吉崎昌一は栽培植物種子278粒中129粒は確実にコメが含まれることから、12号住居居住者のコメに対する強い関心を指摘している。床面直上とされる2層から弥生時代前期土器が多く出土しており、39の高坏の変形工字文の幅広の反転部・41や42の平坦口縁甕・40の有段状の高坏は青木畠式的である。その他、木目状列点文が施された遠賀川系壺と壺用の蓋が見られる。

【弥次郎窪遺跡】青森県八戸市

弥生時代前期の竪穴住居跡が2軒検出されている。7号住居跡では、石囲土器埋設炉+壁柱穴が検出され、炉体土器の(台付?)鉢(49)には、砂沢式～二枚橋式に見られる比較的単純な構成の波状工字文

が施され、肩部が強く張り出す。類例は、馬場野Ⅱ遺跡LVI04住居から出土しているLVI0086Cがあげられる。肩部が下がり張り出す小型壺(50)は、縦型の流水状工字文が施され、平坦口縁甕も出土している。類似した小型壺は軽米町和当地Ⅰ遺跡E14住居跡の波状文が描かれるものや津軽地方日本海沿岸の深浦町津山遺跡第1号住居跡で出土している。津山遺跡例は変形工字文が多条化しており、沈線の細線化と口縁内面沈線の多条化といった五所式と類似した特徴を有する高坏又は鉢と共に出土している。9号住居跡は覆土中から山王Ⅲ層式期の高坏(52)が出土している。耕作による破壊の為、残存しないが9号住居も7号住居同様に土器埋設炉が想定されており、壁柱穴も検出されている。

【田面木平遺跡】青森県八戸市

弥生時代前期の住居跡1軒と遺構外から遺物が出土している。36号住居跡では、石囲土器埋設炉+壁柱穴が検出されている。土器は床面出土から2点、1層出土から2点が掲載されている。楕円文が横位に連続する高坏(46)と、肩部に列点文が施された長胴の広口壺(48)である。48の広口壺は、縄文地文に平行沈線と列点文で施文され、津軽の井沢式の装飾に類似している。1層出土の鉢(47)は短沈線が横位・斜位に描かれており、諏訪台C遺跡で出土している平行沈線が全面にめぐる鉢に類似する。また土器底面に沈線が施される例は、深浦町津山遺跡の第2号住居跡出土の小型壺があげられる。44は小型の甕であるが、口頸部が上下幅を持ち発達し、砂沢式以後であることが想像できる。46の横位に連続する楕円文や47の沈線で全面が埋まる鉢は青木畠式期と考えたいが42の壺の帰属時期が新しそうなこと、44の甕の口頸部が発達することからやや新出の可能性がある。遺構外からは、沈線が多条化・細線化した変形工字文が施される高坏が出土している。変形工字文内外の中点部は彫去や粘土粒貼付といった古い要素もみられるが、青木畠式の新しい段階と考える。

【牛ヶ沢(4)遺跡】青森県八戸市

竪穴住居跡が4軒検出されている。4軒とも、壁柱穴と4本の主柱と石囲炉を有し、炉は3軒までが、土器埋設炉またはその痕跡が残る。各住居跡出土の甕や高坏から砂沢式以後の特徴を持つことは確実である。第6号住居跡床面から出土した高坏(53)は、比較的細めの沈線で、変形工字文C1型→C2型への中間的文様が施される。また大日向Ⅱ遺跡SA32住居跡から出土している高坏(64)は、牛ヶ沢(4)例とは文様モチーフは異なるが、同様に中間的文様と考えられる。高坏の文様から青木畠式の新しい段階と考えたい。

【風張(1)遺跡】青森県八戸市

弥生時代前期の住居跡が8軒検出されている。すべて砂沢式期以降の遺物を含むが、遺物数は少数である。7号住居跡では、石囲土器埋設炉+壁柱穴が検出され、床面や床面に近い2層中から、平行工字文風の文様を有する鉢や無文の大型壺が出土している。馬場野Ⅱ遺跡出土土器群に類似した土器や二枚橋式土器(54)も出土している。甕は肩部が強く張り出し、平坦口縁となる。54は結節沈線や変形工字文B型が施文された二枚橋式期の高坏である。当地域が南北の土器型式の接触地域であることが理解でき、青木畠・山王Ⅲ層式的な土器が在地で生産され、下北地方から二枚橋式がもたらされたのであろう。37号住居跡では、山王Ⅲ層式期の高坏(55)と波状文を有する台付深鉢(2)が出土している。北上川流域と下北地方と系譜を異にする、両器種が器種構成をなすのは、当地域の特徴である。変形工字文と波状工字文と主文様は異なるが、文様の描き順は共通するようで、それぞれの平行沈線部と斜線部を描出後に、反転部を描き文様を完成させている。

[畠内遺跡] 青森県三戸郡南郷村

岩手県との県境、新井田川(雪谷川)の右岸の河岸段丘上に位置する。平成4年から継続的な調査が行われており、砂沢式～山王Ⅲ層式期の集落跡や捨て場が検出されている。

第9号住居跡からは、石畠土器埋設炉が検出されている。床面出土の有文深鉢(57)の横型流水工字文、59の浅鉢は変形工字文A型であり古い要素であるが、体部下半に縄文が施されさらにその中位付近に平行沈線が2条施される装飾は、青木畠式期に認められるものである。砂沢式よりやや新しい段階と考えたい。床面出土の58の有文深鉢は、砂沢式期に比べて無文帯が上下に間延びし、文様帯の幅が器高の1/2程度にひろがり、それに伴い最大径も器高の中位付近に下がっている。60の有文深鉢は、長楕円文中に横走沈線が施されており、青木畠式期の鉢にみられる文様構成である。遠賀川系壺が床面から出土した第53号住居跡は、石畠土器埋設炉が2つ確認されている。住居跡内出土土器より、砂沢式またはその直後の可能性が考えられよう。第54号住居跡も石畠土器埋設炉である。畠内遺跡では、弥生時代前期の住居跡では、八戸地方と同様に、石畠土器埋設炉が用いられる。第54号住居出土の縦型流水工字文が施される壺(63)や、頸部の屈曲が大きく、肩部が強く張り出す甕(61・62)は、山王Ⅲ層式的である。縦型流水工字文が施文された壺は、馬場野Ⅱ遺跡(LVI04住・LV11住)に類例がみられる。馬場野Ⅱ遺跡LVI04住居跡からは、波状工字文間に刺突が充填される台付鉢(報告書中173-4)・肩部に波状文と刺突が施される壺(84)・円板状突起を有する高坏(85・86)・沈線が多条化した変形工字文が施された高坏(83)などが出土しており、山王Ⅲ層式期であろうか。畠内遺跡では捨て場と考えられる遺物包含層からも、青木畠式～山王Ⅲ層式期の土器が砂沢式期の土器に混じって出土しており、第54号住居跡出土土器と同一時期の可能性が高い。

[大日向Ⅱ遺跡(第2次～第5次調査)] 岩手県九戸郡軽米町

数棟の弥生時代前期の竪穴住居跡からは、青木畠式～山王Ⅲ層式的な要素を有する土器が見られる。床面ではなく埋土中からであるが、SA24住居跡からは遠賀川系壺が、SA29住居跡からは壺用の蓋が出土している。SA32住居跡では青木畠式期に特徴的な、崩れた変形工字文C1型が施された鉢(66・65)が見られ、高坏(64)は沈線細線化と器表面のミガキが見られ、文様構成は変形工字文C1型→C2型の中間的形態と考えられる。集落跡から100m程離れた遺物集中区SX01からは、大型の遠賀川系壺の肩～胴部破片が出土しており、共伴とされる土器の中には、青木畠式または山王Ⅲ層式期の壺が認められる。

[大日向Ⅱ遺跡(第6次～第8次調査)] 岩手県九戸郡軽米町

2～5次調査の集落跡から120m以上、遺物集中区SX01から60m以上離れたFⅣ区を中心に弥生時代前期の土器が出土している。煮沸用の有文深鉢の無文帯が間延びしたもの(69)や肩部から強く内湾するもの(70)、変形工字文の三角形部斜辺の描出工程が底辺と完全に分離し、長い波状文が描かれる鉢(73・74)、三角形を基本としない変形工字文(67)や斜辺と底辺描出の分離(72)や流水状工字文(68)が施される高坏は、砂沢式期よりも後出する要素であろう。67の高坏は横長の楕円文をベースに変形工字文(風)の文様が施されるが、諏訪台C遺跡の遺構外出土の高坏にも、同様の文様が描かれる。71の深鉢や75の壺は、変形工字文の底角部が丸みを帯び、三角形部が長楕円状に見える。長楕円をベースにその内側に横走沈線が加えられる文様は、青木畠式期の鉢に描かれ、青木畠遺跡や北上市蔵屋敷遺跡で見られる。高坏または鉢の口唇部を押圧で装飾する要素も見られる。これらの土器群は2～5

次調査出土土器群よりは古い様相を示し、山王Ⅲ層式ほどは細線化しておらず、青木畠式期と考えたい。

【君成田下野場遺跡】 岩手県九戸郡軽米町

新井田川の上流瀬月内川の支流郷坂川の右岸、標高約200mの段丘面に立地する。君成田Ⅳ遺跡は、西方200mに位置する。1964年の発掘資料を、佐藤嘉広が資料紹介している(佐藤 1994)。佐藤はこの土器群の編年的位置付けを、弥生Ⅰa期(ほぼ青木畠式期相当か?)としている。横型流水工字文が施される鉢や浅鉢・有段状高坏・平行沈線が数条単位で施される高坏台部・甕用蓋・壺用蓋の存在より、青木畠式期ではあろうが、変形工字文A型(76・77)が若干残ること・甕頸部の外反の度合いがあまり強くないことから青木畠式期でも古い段階と考えたい。

【馬場野Ⅱ遺跡】 岩手県九戸郡軽米町

雪谷川と瀬月内川支流の郷坂川に挟まれた標高200~250mの丘陵上に位置する。弥生時代前期の住居跡が11棟検出されており、青木畠式~山王Ⅲ層式段階の土器が多く住居跡より出土している。円板状突起が施された高坏など青木畠式的な土器も多く認められるが、沈線文が細線化したものも多く高坏脚部の波状文も4条のものが存在する。報告によれば磨消繩文が施された高坏は無いようである。高坏の変形工字文の各交点に刺突や彫去や軽い粘土の盛りあがりが認められるが、粘土粒の貼付は見られない。沈線は全体的に細線化、断面形は鋭角的であり、無文部は良く磨かれている。脚部文様は平行沈線だけのものと、波状文の組み合わせのものがみられる。甕類は、平坦口縁や山形突起が付され、頸部で“くの字”状に外傾・外反し、口頸部無文で体部以下に横走・斜行繩文が施される器高35~50cm程度のものと、山形突起が多く付され平行沈線・変形工字文が施される器高30cm以下のものに分類されている。平坦口縁とセットになる甕用蓋は、北上川流域には多く認められ、同じ軽米町内の、明らかに馬場野Ⅱ遺跡に先行する段階の君成田下野場遺跡では、甕用蓋が見られるが、当遺跡では見られない。当遺跡内の青木畠式的な土器群と山王Ⅲ層式的な土器群が同段階のものなのか、型式学的特徴どおりに時期的に分離されるものなのかは今後の検討課題である。遺跡内での遺構の新旧関係や型式学的な分析、北上川流域の土器との比較によるこの土器群の見直しと整理が必要であろう。

【和当地Ⅰ遺跡】 岩手県九戸郡軽米町

瀬月内川流域の段丘から続く標高215~222mの緩斜面上に位置し、東方を北流する瀬月内川との比高差は約44mとされる。2軒の弥生時代前期の堅穴住居跡が検出されている。焼失住居であるD12No1住居跡では、弥生時代前期の土器が床面・埋土中・炉内から出土している。住居内埋設土器が1基と石圓土器埋設炉が検出されている。上層に繩文時代晩期の遺物を含む土層が流れ込むが、それを除く弥生時代の土器は時間的にも限定された良好な資料と考えられる。81の変形工字文の要素の欠落(各中点の彫り込みや粘土粒貼付が欠落)や、80の高坏に見られる大型の脚部や平行沈線+無文部という文様は、明らかに砂沢式よりは後出要素である。口縁部に平行工字文を有する壺の体部上半に繩文が施されることも砂沢式期にはあまり見られない要素である。82は山王Ⅲ層式に多い変形工字文C型中に繩文が施されており、その中に刺突が充填される。住居内埋設土器の蓋として利用されていた彫り込みや粘土粒貼付を伴わない変形工字文が重層する鉢(81)は、畠内遺跡の遺構外出土土器(1997報告書中35)や文様モチーフは異なるが馬場野Ⅱ遺跡LV11住居跡・上牡丹森遺跡(22)・砂沢遺跡(報告書中P161・201)にみられる。畠内遺跡例は第54号住居跡または遺構外出土の青木畠式~山王Ⅲ層式期の

遺構外土器と同時期であると考えられる。弥生時代前期と考えられるE14住居跡は、報告によればD12住居焼失後に、構築されたものとされる。

【東北地方北部の青木畠式期土器の時間的関係】

表2 東北地方北部砂沢式～山王Ⅲ層式期編年表

	津軽地方	馬淵川・新井田川流域
山王Ⅲ層・五所式期	津山(1住)・砂沢(A10区)	馬場野Ⅱ・大淵・風張(1)(7住)・弥次郎窪・和当地I・畠内(54住)
青木畠式(新)期	上牡丹森・砂沢(A10区)	馬場野Ⅱ・牛ヶ沢(4)(6住)・大日向Ⅱ(SA32)
青木畠式期	砂沢	大日向Ⅱ(FIV区)・畠内(9住)
青木畠式(古)期	砂沢・宇田野(2)・諏訪台C	君成田下野場・戸沢川代・前坂下(3)
砂沢式・山王Ⅳ上層式期	砂沢	是川堀田・畠内(99報告—遺構外)・君成田Ⅳ(J55住)

量的に少ない土器群など時期の認定が困難であったが、各土器群の比較によって考えた東北地方北部の青木畠式期前後の土器群の時間的関係を表2にまとめた。その結果、青木畠式期に属する土器群が、津軽・馬淵川・新井田川流域地方共に少数である。これは、まず宮城県地方と馬淵川・新井田川流域地方の地域性を把握できず、その為、各土器群の持つ地域性を時期差と誤認した可能性があげられる。馬淵川・新井田川流域を介在させて、東北地方北部と中部の時間的対応関係の理解も期待したが、不完全と言わざるを得ない結果となった。地域内での前後関係はある程度整合性を持つと考えているが、地域間での同時代性にはズレが生じている可能性は否定できない。

4 特定細別器種の分布と土器の動き

青木畠式～山王Ⅲ層式に特徴的な細別器種を抜き出し、その分布を概観することで該期の土器の動きと広がりを把握したい。

①平坦口縁で、平行沈線と無文帶で装飾される高坏

坏部が緩やかに内湾し、平坦口縁を有する高坏。脚部の装飾が3条一組の平行沈線のものが多い。青森県砂沢・上牡丹森・牛ヶ沢(4)・田面木平・畠内(三林1997・茅野2000)、岩手県軽米町和当地I・馬場野II・都南村(現盛岡市)手代森・湯田町本内II(山王Ⅲ層式期?)・大船渡市上甲子・長谷堂貝塚・陸前高田市中沢浜貝塚、宮城県一迫町青木畠・気仙沼市田柄貝塚で出土している。青木畠式の分布圏全域に存在し、圏外の津軽地方にも持ち込まれている。

②平坦口縁で、変形工字文が施される高坏

坏部が緩やかに内湾し、平坦口縁を有する。これも平行沈線と無文帶を有する高坏と同様に、青木畠式分布圏全域に存在し、津軽地方の砂沢遺跡や下北半島の脇野沢村瀬野遺跡・大館市諏訪台C遺跡・秋田市湯ノ沢F遺跡でもみられる。砂沢遺跡・瀬野遺跡例は金雲母を含み、岩手県域からの搬入品の可能性が高い。砂沢遺跡例の1点(1)は変形工字文A型が施され、青木畠式期でも古手の様相を示す。大日向II遺跡のFIV区でも、横型の流水状工字文が施されたもの(68)が出土している。

③有段高坏

生石2式に特徴的なこの形態は、太平洋側の青木畠遺跡などでも見られ、北上川流域及び新井田川・馬淵川流域や三陸地方にも分布する。二枚橋式・山王Ⅲ層式にもこの器形は見られる。生石2式ではこの有段タイプが高坏の主体をなすのに対し、二枚橋式を除く他地域ではそれ以外が主体的である。

青木畠式期のものは青木畠・君成田下野場(78)・八幡(40)、青木畠～山王Ⅲ層式期のものは畠内・馬場野Ⅱ・砂沢・田面木平遺跡などで出土している。古い段階での有段高坏は、後述する丸底鉢と文様帶・文様構成において共通点が多く、東北地方中部日本海側では両者が共存するが生石2遺跡では圧倒的に有段高坏が多い。

④丸底鉢

縄文時代晚期終末～弥生時代前期に、宮城県～福島県北部・山形県・秋田県南部の東北地方中部を中心に分布するものである。青木畠遺跡では、表採資料に含まれているが、装飾からみて青木畠式期と考えられる。東北地方北部では、剣吉荒町・君成田Ⅳ遺跡で出土している。丸底鉢は、口頸部と胴屈曲部の上下2つの文様帶を有し、その中間部には無文帶が存在する。この文様帶の構成は、上記の有段高坏と共通し、またそれぞれの文様帶の文様も類似する。

⑤上部で膨らみを有する筒形の土器(上膨筒形土器)

青木畠式・生石2式を構成し、東北地方中部を中心に、丸底鉢よりは狭いが同様の分布をみせる。馬淵川・新井田川流域や三陸地方では存在しないようである。山形県生石2・上竹野・蟹沢・地蔵池・観音岩、秋田県上熊ノ沢・梨ノ木塚・湯ノ沢A、宮城県青木畠・鱸沼、福島県藤堂塚遺跡などで見られる。系統不明の土器で、突如として現れるようである。

【まとめ】

①と②は青木畠式の高坏の移動範囲を、④と⑤は東北地方中部の青木畠式期の地域圏を示していると考えられる。金雲母を多く含む土器に関しては、須藤隆や利部修によって注意され、花崗岩の崩落土を産する北上山地地方からの搬入品であることが指摘されていた。金雲母を含み、橙色系の色調を帶びるものは岩手県域からの搬入品と考えられそうであるが、このような土器は、八戸地方だけでなく、津軽下北地方・秋田県北部にももたらされている。山王Ⅲ層式期に盛んに混和されるようであるが、その前段階の青木畠式期にも、奥羽山脈を超えていることは確実であり、また諏訪台C遺跡では砂沢式期の可能性もある。岩手県域から、津軽・秋田北部地方に持ち込まれた土器は、平行沈線と無文帶又は流水工字文・変形工字文A型が施された高坏と縄文時代晚期後葉からの伝統的な壺の2器種に限られる。また反対に、断面半円形の太い沈線と器表面の光沢をもたらす丁寧なミガキを特徴とする、砂沢式の鉢類は津軽地方以外へもたらされている。八戸・岩手北部地方の砂沢式とされる土器には鉢・有文深鉢・台付鉢・壺等がある。これらは八戸地方での製作であろうが、特徴的に砂沢式と呼べそうな土器は、在地の土器中に少量混じる程度である。砂沢式に特徴的な無文帶を有する煮沸用の有文深鉢は馬淵川・新井田川流域でも定着している。

青木畠式が土器型式としてまとまりをもって、分布するのは仙台平野・三陸沿岸部・北上川流域・馬淵川・新井田川流域であろう。馬淵川・新井田川流域は、砂沢式・二枚橋式との接触域であり、北の土器型式の要素を多分に有するが、北上川流域との共通性が高いことも事実である。北上川流域は、遠賀川系土器の受容が、日本海沿岸部・津軽地方・馬淵川・新井田川中下流域より一段階遅れるとされている。しかし、最近では馬淵川中流域の二戸市足沢遺跡で、大洞A'式に伴った「板付Ⅱa式」の壺肩部破片の出土が報告されている(須藤1999)。青木畠式の前段階からの、奥羽山脈の東西の交流の結果が、金雲母を含む土器や砂沢式土器の相互移動として確認される。当初、東北地方北部の青木畠式期の、土器群の大まかな前後関係と土器の動きを把握したいと考えていたが、量的に少ない土器群での時間

軸の整理は、時期尚早の感はある。自分なりに設定した段階に各土器群をあてはめたのであるが、青木畠式併行の東北北部の土器群が僅かなものとなった。北上川流域の山王Ⅳ上層式から山王Ⅲ層式までの細かな変遷を私自身理解できていなかったことと、特に津軽地方に関しては青木畠式の分布圏外であり、馬淵川・新井田川流域を介在させなくてはならず、その為直接的に時間的位置が確定できなかった。地域内での緻密な編年の確立後に、他地域との比較もより意味のあるものとなろう。変革期の様相の追及には課題は多く、砂沢遺跡・馬場野Ⅱ遺跡・生石2遺跡など豊富な資料の再検討、該期の秋田県中南部内陸と山形県・岩手県の関係、恵山式土器と共に通点を有する二枚橋式土器の存続期間、五所式の型式内容と存続期間、在地土器の細かな編年による遠賀川系土器の時期決定、瀬野遺跡で出土した遠賀川系壺の評価、渡島半島をはじめとする北海道との関係、列島内外での東北地方の該期社会の評価等があげられよう。埋蔵文化財の調査・保護に携わるものとして、今後も該期の究明にあたり、改めて稿を起こしたいと考えている。

本稿の作成にあたり、多くの方々にご協力・ご指導をいただきました。特に文献の入手にあたって、畠山昇氏、仙庭伸久氏、矢島敬之氏、木村高氏、藤井誠二氏、菅原哲文氏、茅野嘉雄氏、佐藤智生氏にはご配慮いただきました。感謝申し上げます。

『参考文献』

- 安部 実 1986 『生石2遺跡発掘調査報告書(2)』 山形県埋蔵文化調査報告書第99集
- 伊東 信雄・須藤 隆 1982 『瀬野遺跡』
- 岩見 和彦 1991 「東日本における稻作の受容—宮城県—」第1回東日本埋蔵文化財研究会
- 小笠原善範 1992 『八幡遺跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第47集
- 利部 修 1990 「諏訪台C遺跡のI・II類土器群—土器の観察を通して—」秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第5号
- 葛西 励 1991 『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』青森県川内町教育委員会
- 加藤 道男 1982 『青木畠遺跡』 宮城県文化財調査報告書第85集
- 金子 昭彦 1999 『長谷堂貝塚発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第296集
- 木村鐵次郎 1989 『西津軽郡鰺ヶ沢町大曲遺跡発掘調査報告』青森県立郷土館調査研究年報 第13号
- 工藤利幸他 1986 『馬場野Ⅱ遺跡』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集
- 小林 圭一 1997 『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
- 小林 克 1991 「東日本における稻作の受容—秋田県—」第1回東日本埋蔵文化財研究会
- 斎藤邦夫他 1995 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書—第2次～第5次調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集
- 酒井 宗孝 1986 『駒板遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 98集
- 笠森 一朗 1997 『津山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
- 佐藤 信行 1980・81 「東北南部における縄文晩期とその直後の土器文化(上)・(下)」『考古風土記』5・6
- 佐藤 嘉広 1989 「東北地方北部における弥生文化受容期の様相—北上川中流域の土器群の分析を中心に—」
『岩手県立博物館研究報告第7号』
- 佐藤 嘉広 1991 「東日本における稻作の受容—岩手県—」第1回東日本埋蔵文化財研究会
- 佐藤 嘉広 1992 「東北地方における遠賀川系土器の受容と製作」 『東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 佐藤 嘉広 1994 「岩手県二戸市金田一川遺跡出土の遠賀川系土器について」『岩手考古学』6
- 須藤 隆 1983 「東北地方の初期弥生土器」『考古学雑誌』68-3
- 須藤 隆 1990 「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集
- 須藤 隆 1997 「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』第89号
- 須藤 隆 1998 「東北日本先史時代文化変動の研究」
- 須藤 隆・太田 昭夫 1999 「第三章 弥生時代」『仙台市史 通史編1 原始』
- 高瀬 克範 1999 「東北弥生社会の住居と居住単位」『古代文化』55
- 高木 晃 1998 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書—第6次～第8次調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集
- 三林 健一 1997 『畠内遺跡Ⅳ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第211集
- 永嶋 豊 1999 『畠内遺跡V』 青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
- 茅野 嘉雄 2000 『畠内遺跡VI』 青森県埋蔵文化財調査報告書第276集

- 中川重紀他 1996 『和当地I 遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第259集
- 野村 信生 1997 『宇田野(2)・(3)、草薙(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第217集
- 秦 光次郎 1998 『見立山(1)遺跡・弥次郎窪遺跡II』 青森県埋蔵文化財調査報告書第238集
- 八戸市教育委員会 1988 『田面木平遺跡(1)』
- 八戸市教育委員会 1990 『風張(1)遺跡II』
- 福田友之他 1986 『上牡丹森』 大鰐町文化財調査報告書第1集
- 松本 建速 1998 「大洞A'式土器を作った人々と砂沢式土器を作った人々」 『北方の考古学』 野村崇先生還暦記念論集
- 村木 淳 1996 『牛ヶ沢(4)遺跡I』 八戸市教育委員会
- 村越 潔 1965 「東北北部の縄文式に後続する土器」 『弘前大学教育学部紀要』 第14号
- 矢島 敬之・松本 建速 1988・1990 『砂沢遺跡発掘調査報告書－本文編・図版編－』

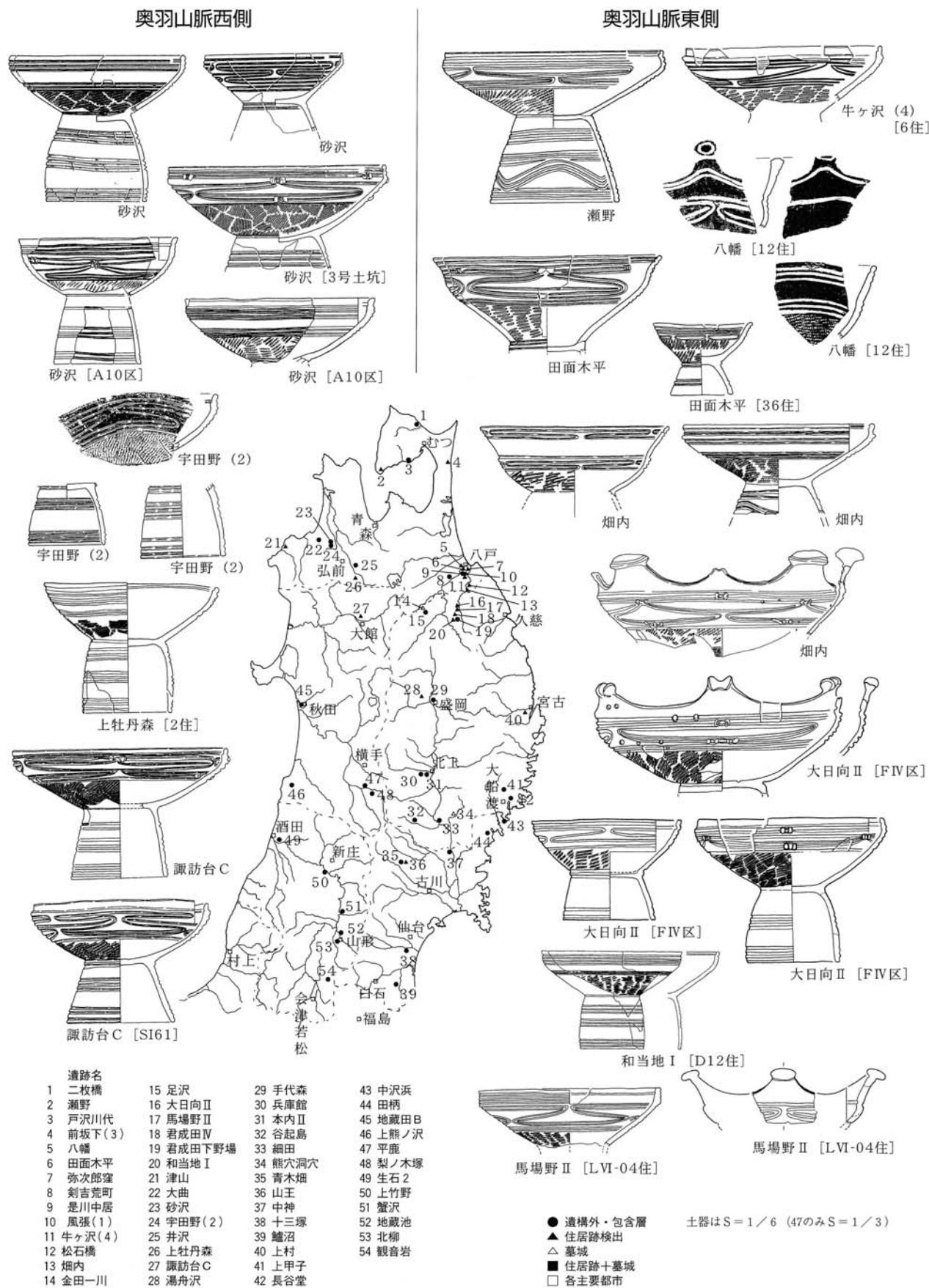


図1 東北地方北部 青木畠式高杯

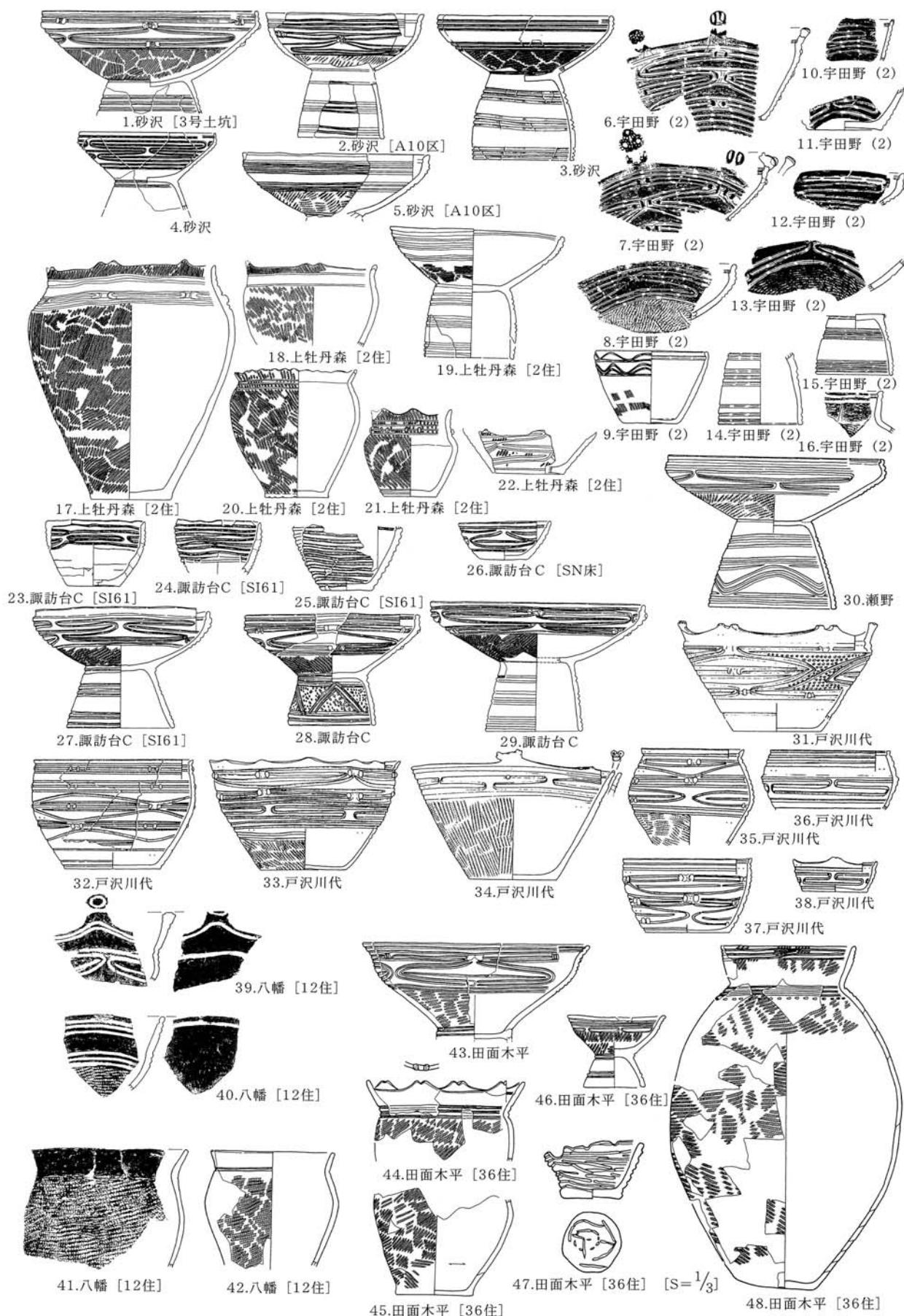


図2 津軽・下北・八戸地方（馬淵・新井田川流域）の青木畠式期土器

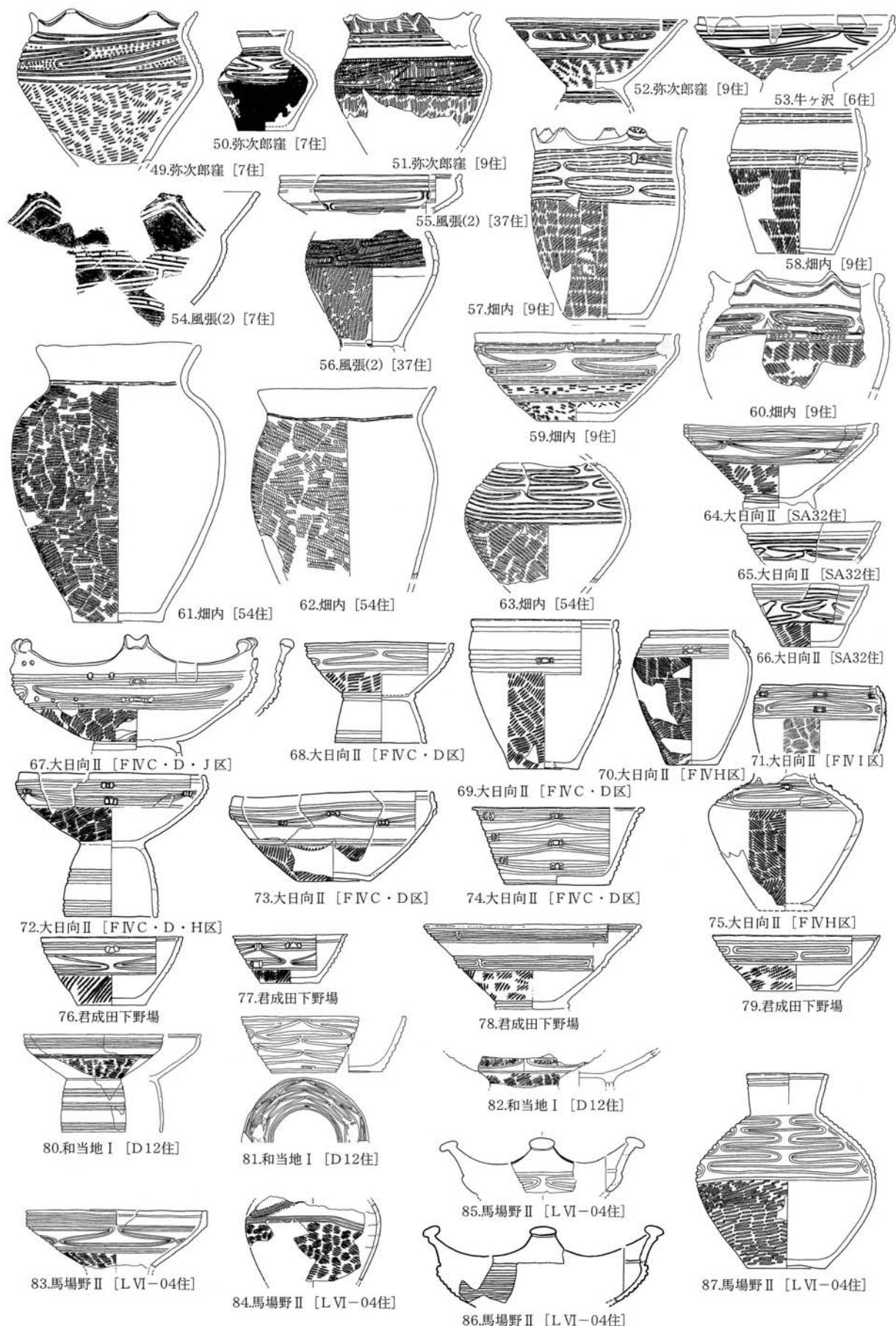


図3 八戸地方（馬淵・新井田川流域）の青木畑式期土器